

アトリエ 琉游舎 だより 224号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2026年2月11日日発行

柊鰯 鰯の頭も信心から

○柊鰯（ひいらぎいわし）は、節分に焼いた鰯の頭を柊の木の枝に刺したもので、家の玄関の軒下や門などに下げます。魔除けです。鰯の臭いで、邪気の象徴である鬼を追い払ってしまう、それでも鬼が家の中に入ろうとしたら、柊の枝で刺してしまうというような願いが込められたもののようです。節分の豆まきと共通の思いが込められた民間信仰です。

○「鰯の頭も信心から」は柊鰯の風習から生まれた諺のようです。鰯の頭のようにありふれた取るに足りないものも信仰すれば尊い存在になることを示しているのです。私は柊鰯を玄関に下げたこともありませんし、邪気の象徴である鬼の侵入を阻止しようと考えたこともありません。ただ「鰯の頭も信心から」の言葉には信心の本質が表現されていると思われま

○「信心」という言葉に表れているように、「信」は「心」の作用です。鬼（魔）を引き入れるのも「心」、鬼を除くのも「心」です。私たちは煩惱から逃れることはできません、煩惱があるからこそ生きているとも言えるのです。煩惱が「悪」に向かおうとするときに心の魔を鎮める働きが信心です。煩惱（生きること）を「善」に向かわせる働きが信心なのです。

○信心は心の働きですから、外からの作用に影響を受けても、信心を決するのは私自身です。自分でない何かがあなたの信心を左右しているという誘惑にこの世は溢れています。しかし布施の多寡や活動の熱心さなどの誘惑があなたの「魔」を取り除いてくれることはありません。「魔」を取り除くことができるのは唯一あなたの心です。自分自身の心への「信」です。

○私たちは鰯の頭にも、路傍の石にも、目の前の小高い山にも自身の「信心」を映し出すことができます。そこが私たちのカミとホトケです。自身の心を他者（自然や社会）に投影して、ありのままの私の心を知り日々を生きること、それが信心であると私は信じています。

写経会3月1日（日）13時半から

読書会を再開します

毎月2週・4週の火曜日 13時半

テキストは「**選択本願念仏集**」です。

2月10・24日（火）13時半から

狂言綺語…カミとホトケの出会いⅦ(承前)

節分は文字通り季節の分かれ目とは分っていても、立春以降は季節は春とは分っていても、やはりそれは暦の上だけです。まだ水道管の破裂を心配しなくてはならないし、雨や雪の後の道路の凍結も心配しなくてはなりません。それでも今年例年より朝晩の冷え込みが弱いようで、蓮池は全面結氷することなく、鴨も氷のない日当たりのよい池の岸近くに固まって越冬しています。そろそろジャガイモの種芋が店頭に並ぶ頃です。3月に向けて畑を耕して準備を始めなければいけない季節です。そう考えると気候はまだ冬でも、気持ちは春に向かって動き始めたようです。実際この前まで地面は茶色の枯れ草だらけでしたが、所々から青い草がみえています。樹木もよく見ると一枚も葉っぱがない枝に青い芽が見えてきました。春が観えます。

自然は再現性の法則の中に生きています。今年で10回目の冬をこの地で迎えることになりましたが、例外なく冬の後には春がやってきました。1年は必ず繰り返されてきました。日々の移ろいにいつもと違う変化を感じたとしても、それは自然は必ず再現される(繰り返される)という安心感に裏付けされた、一瞬の心の揺らぎ、情緒の表れです。それは自然が示す再現性に慣れた日常へのささやかなアクセントなのかも知れません。その戸惑いはすぐに信頼へと変わるでしょう。例えばそれは手を合わせる、頭を下げる、と言うような形になって表れる自然との対話です。自然への信頼、感謝、畏怖。私たちの力も考えも及ばない大なるものへの礼拝です。時にはその信頼を打ち砕くような打撃(災害)を与えられることもあるでしょう。それでも人はまた自然がいつもの自然であることを信じて、手を合わせ頭を垂れるのです。そして自然は何事もなかったようにまた次の季節を用意してくれるでしょう。季節が季節を再現する、それが自然です。

三島由紀夫は「文化防衛論」で日本文化の特質は「再帰性・全体性・主体性」の三つに要約されると述べています。この三つの要約に関しては全面的に肯定するにしても、天皇を日本文化特有の「菊と刀(文武両道)」の根源と位置づけ、日本文化の危機(戦後一貫して日本文化は危機にあると言う三島の認識、それは今日まで続いている)において、天皇が再帰的な文化防衛の主体となるという主張には私は同調できません。「菊と刀」はルイス・ベネディクトが戦時中のアメリカ政府の要請を受けて書いた日本文化の研究書です。日本文化の特質を優美な芸術を愛する「菊」と厳格な武士道「刀」の矛盾する両面から解明した名著ですが、そこでは三島の言う「全体性(菊と刀の矛盾を美的に容認すること)」の中心に天皇を位置づけている訳ではありません。もちろん天皇がその要素のひとつではありますが、義理や恩、共同体、恥、徳、修業、人情などの私たちありふれた日本人の精神の底流を流れる、道徳観・倫理観を分析し、それが日本人の行動原理となっていることを解明しています。私はその精神を天皇中心に集約される単純なものではなく、仏教や儒教や道教や西洋理性などのあらゆる外来の考え方がカミと融合、折衷して形成された日本文化だと考えます。

私は私の考える「カミ」を日本の自然と同義であると考えます。自然そのものが私たちのカミです。自然は365日で再現されます。その再現性を信じて、人は感謝し畏怖し崇拝したのです。その回帰は自然の輪廻です。しかも必ず365日の間に真円となって繰り返されるホトケの法です。八百万のカミ(情)とホトケの法(知)の出会いです。真円は法の真理と絶対性の具現です。自然は真円で輪廻する不死の存在です。一方、私たちは死すべき存在です。日本文化の再帰性と三島が言うとき、その再帰性とは文化(知と情)は過去にのみ属する「完結したもの(博物館の陳列物)」ではなく、現在を生きる私たちの知と情に連続性と再帰性が喚起されると述べています。再現される自然(カミとホトケ)、つまり不死の存在に死すべき人が文化として受け継いできた知と情を、今を生きる私の中に再帰させることを繰り返してきた形が日本文化の伝統と呼ばれるものです。ホトケの法は日本のカミ(自然)と出会って、再現する自然=カミ(情)に再帰することを可能としたのです。それはカミに空の視点を与えることです。縁起の法です。ありのままと観る世界が、必ず1年と言う時を経て再現される自然をホトケの法と観る視点です。私たちはそのカミとホトケの出会いの所に再帰し続けることで、永遠の生(日本人の文化や精神)を未来へと繋げることができているのです。それが三島の言うところの日本文化の三要素、「再帰性」「全体性」「主体性」です。しかしそれは、三島の考える天皇中心に集約される三要素ではありません。あくまでもその文化の再帰は私たち各人のカミとホトケにあるからです。それは外から与えられるものではなく、各自の「情」と「知」が自ずと受け継ぎ、受け渡そうとするカミとホトケだからです。自然をありのままに観る各々の視点が各々のカミとホトケに出会うことから、文化の再帰が始まると考えます。天皇に再帰しても私には如何なるカミも立ち現れません。

カミとホトケの出会い以来、日本ではお釈迦様の考えた仏教は大きく変質しました。それが象徴的に表れている言葉は以前この欄でも言及しました。「草木国土悉皆成仏」と道元禅師の和歌「峰の色 谷の響も皆ながら 吾が釈迦牟尼の声と姿と」です。前者の言葉は印度の思想ではなく、六世紀の中国仏教の中に見いだされるようですが、大きく思想として定着したのは日本です。国土全体が緑と水に囲まれ四季の変化が様々な自然の姿を見せてくれる日本だから可能だった考え方です。草木や大地のような非情なものも、仏性を持って成仏する、森羅万象全てがホトケであるという考えです。道元の和歌も全く同じです。日本の国土全てが釈迦牟尼の声と姿です。自然そのもの=八百万のカミの中にホトケ様がおわします。これは原始信仰(カミ・情)と普遍宗教(ホトケ・知)の融合です。絶対神が西欧を席卷するとき、各民族の原始信仰を取り入れたという主張もありますが、それは絶対神への吸収合併です。しかし日本の場合には原始と普遍双方の融合で作られた新たな日本独自の信仰です。だから日本独自、唯一無二の精神の基礎となり得たのです。